

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 5 日現在

機関番号：13501

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2015～2016

課題番号：15H06238

研究課題名(和文) 明末清初における異姓書坊間の広域的連携の研究 覆刻・翻刻を手掛かりに

研究課題名(英文) A Study on the wide-area cooperation between publishers owned by different clans in the late Ming and early Qing periods : With special reference to the examples of reprint

研究代表者

上原 究一 (UEHARA, Kyuichi)

山梨大学・総合研究部・准教授

研究者番号：30757802

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,100,000円

研究成果の概要(和文)：江戸時代の日本で互いに血縁関係の無い書坊間で地域を超えた提携が当たり前に行われていたことは周知の事実であるが、近代以前の中国におけるそうした事例は従来あまり知られてはいなかった。

しかし、本研究を通して、明末清初にそのような事例が存在することを明らかにすることが出来た。例えば、金陵(現在の江蘇省南京市)の唐氏や周氏の書坊と、建陽(同じく福建省建陽区)の余氏の書坊とは、相互に重刊の権利を認め合う提携関係にあったと認められる。

研究成果の概要(英文)：It is a well-known fact that during the Edo period in Japan it was perfectly normal for publishers whose owners were unrelated by blood to engage transregionally conduct an agreement projects, but not many such cases had not been known in premodern China. But by this research, I was able to clarify the existence of such examples in the late Ming and early Qing periods. For example, the publishers of the Tang and Zhou clans in Jingling, and the publishers of the Yu clans in Jianyang, were in a cooperative relationship that recognized their right to reprint each other's publications.

研究分野：中国文学、書誌学

キーワード：中国文学 書誌学 覆刻・翻刻 出版文化 書坊 章回小説 版本 挿画

1. 研究開始当初の背景

中国の明末清初の商業出版の実態をめぐっては、日本の江戸時代には非常に多くの事例が知られている、互いに同族ではない書坊（書肆とも。出版業者のこと）同士の連携や協力の事例が、殆ど知られていなかった。せいぜい福建で作られた版木が金陵の姓の異なる書坊の手に渡ったとか、その逆だとかいった、版木の売買ないしは移譲が想定されている程度で、覆刻本というと直ちに無許可の海賊版だと看做されるのが常であった。

しかし、研究代表者が申請時点までに行ってきた、明末清初の金陵（現在の江蘇省南京市）の唐氏や周氏の書坊、および同時期の建陽（現在の福建省建陽市）の余氏の書坊の活動状況や歴代主人についての一連の研究の中で、明代の万暦前期には同郷ながら姓は異なる唐氏と周氏が金陵でそれぞれ営む書坊の間に明らかな提携が認められることや、同時期に建陽で余氏が営む書坊には金陵の周氏や唐氏の刊本を数多く数年以内に覆刻ないしそれに近い形態で翻刻している例が、章回小説刊本を中心に複数あることが分かってきた。

その中で研究代表者は、余氏の書坊が、自らの名と、覆刻の際に底本とした金陵刊本の刊行者であった唐氏や周氏の名とを、どちらも刊行者として明記するのが通例であることに気付き、無許可での海賊版であればわざわざ両者を併記するとは考えにくいので、それらは両者が正式に提携を結んでの出版であったのではないかとの見通しを立てた。

2. 研究の目的

以上の経緯を踏まえ、明末清初の時期には世徳堂・万巻楼など唐氏・周氏が金陵で営む書坊と、萃慶堂・双峰堂など余氏が建陽で営む書坊との間に一定の提携関係を認めるべきことを明らかにした上で、その提携の実態がどのようなものであったかを把握することを本研究の第一の目的に定めた。それに続く目標として、多くの章回小説を刊行していた上記の金陵や建陽の書坊が、「李卓吾先生批評」と銘打つ章回小説の主な出版地であったと見られる蘇州や杭州などの書坊とどう関わっていた（或いはいなかった）のかを考察することも目指した。

また、大手書坊の活動状況や歴代主人については、本研究計画の申請時点で既に金陵の唐氏と周氏については一定の成果を発表しており、建陽の余氏についても、萃慶堂系・双峰堂系・永慶堂系・自新齋系の四つの血統に分類した上で、萃慶堂については活動時期や歴代主人についての考察を発表済みであった。そこで、残る余氏の三系統についての調査を進め、成果を発表することを目指した。

更に、申請時点で研究代表者の目撃に及んでいた限りにおいては、先行研究で版木が福建から金陵に渡ったとか、その逆だとか考えられていた事例は、いずれも実際には異なる

版木によって刷られており、建陽の書坊が金陵刊本を覆刻したと看做すべきものであった。1部の書物あたり優に数百枚に及び版木が遠く離れた金陵と建陽の間を移動するようなことは、あったとしてもごく稀で、金陵と建陽の書坊が提携関係を結んで同じ書物を出版する場合、覆刻や翻刻が主な手段だったのではないかと予想されたので、事例の収集を進めての検証を図ることとした。

3. 研究の方法

金陵と建陽で同じ書物（コンテンツ）が出版された事例をなるべく多く収集して分析することと、両地の大手書坊の活動時期や歴代主人についての調査を進めることが本研究の中心的な課題となる。また、それらに続く目標を達成するためには、「李卓吾先生批評」と銘打つ章回小説の出版状況について、先行研究での成果よりも更に進んだ詳細を把握することも望まれる。

いずれの点についても、日本・中国・台湾を中心とする各地の所蔵機関に収められたそれぞれの条件に該当する刊本をなるべく網羅的に調査してその実態を把握する必要がある。特に、複数の書坊の手で刊行されている書物については、各刊本の複写物入手して細かく比較対照し、それらの関係が底本の版面をほぼ忠実に再現した覆刻であるのか、或いは覆刻に近い翻刻であるのか、それとも版面の様相を一新した翻刻であるのか、はたまた本文を大きく改変した翻刻であるのか、或いは底本と同一の版木で刷られているのか、という点を厳密に分析して正確に理解することが欠かせない。

上記の作業と、研究代表者が本研究の開始以前に明らかにした明末清初の金陵や建陽の書坊の歴代主人や活動実態とを照らし合わせて、金陵の書坊と建陽の書坊との具体的な関わりについて総合的に考察する。

4. 研究成果

(1) 第一の目的に関しては、当初の見通しに沿った事例が多数確認出来た反面、反証となる事例は得られなかったため、論文「明末の商業出版における異姓書坊間の広域的連携の存在について」を『東方学』第131輯に発表し、建陽の余氏の書坊と同じ建陽の同族ではない書坊と一定の提携関係が認められ、その一部は姻戚関係を背景にしていること、万暦以降の明末には、世徳堂・万巻楼など唐氏・周氏が金陵で営む書坊と、萃慶堂・双峰堂など余氏が建陽で営む書坊との間に、各自の刊本を翻刻・覆刻して相手の地盤で販売することを認め合う形での提携関係が存在したと考えられること、金陵の周氏が刊行した医書『万病回春』は、周氏自身が短期間に翻刻を繰り返しているほか、建陽の余氏・蘇州の葉氏・杭州の汪氏の各書坊の手で翻刻されていることが確認出来たが、周氏が清初に翻刻を行った際の序文で杭州での

翻刻だけを挙げて質の悪い海賊版だとして激しく非難していることから、杭州の翻刻本が明らかに無許可の海賊版であった一方、建陽と蘇州の翻刻には周氏の許可を得ていた可能性が考えられることなどを指摘した。

この論文は、書坊間の広域的連携の存在を明らかにしたという出版史研究上の意義はもとより、制作において書坊が主導的な役割を果たしていた白話小説等の成立過程を解明するためにも重大な意義を持つと評価され、平成 28 年度第 35 回東方学会賞を受賞した（「第三十五回 平成二十八年度 東方学会賞発表表」、『東方学』第 133 輯、2017、p90 参照）。

（2）余氏の書坊の活動状況と歴代主人に関しては、四つの血統のうちの自新齋系についての知見がまとめられ、論文「自新齋系統について 建陽余氏刻書活動研究（2）」を『山梨大学国語・国文と国語教育』第 21 号に発表した。残る双峰堂系については収集した事例が多すぎて分析を終えることが出来ず、永慶堂系については逆に得られた事例が少なすぎて、いずれも本研究期間中に知見をまとめて公表することは出来なかった。これらの問題については、平成 29 年度に研究代表者として科学研究費若手研究（B）に採択された「明末清初の商業出版における同族書坊の広域的経営の実態の研究」において引き続き取り組んでゆく所存である。

（3）「李卓吾先生批評」を銘打つ章回小説の出版状況については、かつて 2012 年度日本中国学会賞受賞論文「『李卓吾先生批評西遊記』の版本について」（『日本中国学会報』第 63 集、2011）で『西遊記』について網羅的な調査結果を公表していたが、当初は本研究計画においては副次的な要素になると考えており、余裕があれば進めるという程度のつもりであった。

しかし、本研究計画と同期間に研究分担者として参加していた住吉朋彦氏を研究代表者とする科学研究費基盤研究（A）「宮内庁書陵部収蔵漢籍の伝来に関する再検討 デジタルアーカイブの構築を目指して」において宮内庁書陵部所蔵漢籍の調査を進める中で、その中の「傳奇四十種」に収める戯曲刊本『楊東來先生批評西遊記』の書名が『李卓吾先生批評西遊記』から改刻されたものだったのではないかという磯部彰氏の予想（磯部彰、『『西遊記』形成史の研究』、創文社、1993、p334 参照）を裏付ける事例を発見した。つまり、万暦年間には、従来知られていた章回小説刊本『李卓吾先生批評西遊記』の他に、異体字の相違を除けばそれと全く同じ書名でありながら内容は根本的に異なる戯曲刊本『李卓吾先生批評西遊記』も刊行されていたと判明したのである。そこで、その基盤研究（A）の成果報告会において、口頭発表「徳山毛利家旧蔵「傳奇四十種」所収『楊東來先

生批評西遊記』の書名改刻をめぐる 原題は『李卓吾先生批評西遊記』か？」を行った。

更に、本研究課題において上海図書館で調査を行った際に、同じ「傳奇四十種」に収める戯曲刊本『一笠箆批評玉簪記』の書名も、『李卓吾先生批評玉簪記』から改刻されたものであることが判明した。刊行者名も新都の書坊から蘇州の書坊に改刻されているので、これは（金陵と建陽ほどには遠く離れていないとはいえ）版木を当初の刊行地域とは別の地域に移して印刷が続けられた事例にあたる可能性も考えられる。そこで、その成果を加えた中国語口頭発表「《傳奇四十種》所収《楊東來先生批評西遊記》の書名改刻問題」を行った上で、論文「もう一つの『李卓吾先生批評西遊記』 「傳奇四十種」所収『楊東來先生批評西遊記』及び『一笠箆批評玉簪記』の書名改刻をめぐる」を『日本中国学会報』に投稿し、2017 年 10 月刊行予定の第 69 集への掲載が決定している。

（4）また、前述の基盤研究（A）の研究分担者としての活動の中で、やはり宮内庁書陵部が所蔵する、杭州の容与堂が万暦後期に刊行した四種の「李卓吾先生批評」を銘打つ戯曲刊本を調査する機会を得た。容与堂は同時期に章回小説刊本『李卓吾先生批評水滸伝』を刊行したことも名高い書坊なので、本研究課題においても容与堂の刻書活動の状況について調査を進めることとした。

その結果、容与堂が刊行したと明記されている書物は、上記の小説 1 種と戯曲 4 種の他には、やはり同時期の「李卓吾先生批評」を銘打った戯曲 1 種だけしか確認出来ないことと、それら 6 種の全てに複数の版が現存する（即ち、覆刻本があった）ことが判明した。この問題については中国語口頭発表「关于容与堂刊本小说、戏曲」を行って初歩的な知見を発表したが、本研究期間中に論文にまとめるところまでは進まなかった。容与堂の刊本が容与堂とは異姓の書坊の手で覆刻されていたのか、それとも容与堂自身ないしはその同族の書坊が覆刻を行っていたのかという問題も残っているため、前述の若手研究（B）「明末清初の商業出版における同族書坊の広域的経営の実態の研究」において研究を継続したうえで論文にまとめるつもりである。

（5）なお、本研究期間中に研究代表者が直接赴いて所蔵刊本の書誌調査を行った主な機関は、海外では中国国家図書館、首都図書館、上海図書館、台湾国家図書館、台湾大学など、国内では国会図書館、国立公文書館、宮内庁書陵部、東洋文庫、公益財団法人無窮会、名古屋市蓬左文庫、東京大学、京都大学、東北大学、宮城県図書館、茨城大学、都立中央図書館、中之島図書館、神戸市立中央図書館、神戸大学、関西大学などである。また、

上記以外の機関の所蔵する資料でも、ウェブサイト上で画像データが公開されている場合や、公刊済みの影印本がある場合には、可能な限り参照して事例の収集に努めた。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計3件)

上原 究二、もう一つの『李卓吾先生批評西游記』 「傳奇四十種」所収『楊東來先生批評西游記』及び『一笠箒批評玉簪記』の書名改刻をめぐる、日本中国学会報、査読有、第69集、2017、pp.未定(印刷中)

上原 究二、自新齋系統について 建陽余氏刻書活動研究(2)、山梨大学国語・国文と国語教育、査読無、第21号、2016、pp.110-122

上原 究二、明末の商業出版における異姓書坊間の広域的連携の存在について、東方学、査読有、第131輯、2016、pp.52-70

[学会発表](計3件)

上原 究二、关于容与堂刊本小说、戏曲、国際シンポジウム「中国古典小説30年の回顧と展望」、2016年9月5日、神奈川大学横浜キャンパス(神奈川県横浜市)

上原 究二、探讨《傳奇四十種》所收《楊東來先生批評西游記》の書名改刻問題、第15届中国古代小説、戏曲文献暨数字化国際研讨会、2016年9月2日、早稲田大学戸山キャンパス(東京都新宿区)

上原 究二、徳山毛利家旧蔵「傳奇四十種」所収『楊東來先生批評西游記』の書名改刻をめぐる 原題は『李卓吾先生批評西游記』か?、[宮内庁書陵部収蔵漢籍画像公開記念国際検討集会]日本における漢籍の伝流 デジタルアーカイブ「宮内庁書陵部収蔵漢籍集覧」の視角、2016年6月4日、慶應義塾大学三田キャンパス(東京都港区)

[図書](計1件)

瀧本 弘之・松浦 智子・上原 究二、中国古典文学挿画集成(十)・小説集〔四〕、2017、単著分担部分 pp.(11)-(38)、全(57)+349頁

6. 研究組織

(1)研究代表者

上原 究一 (UEHARA, Kyuichi)
山梨大学・大学院総合研究部・准教授
研究者番号: 30757802